

市民活動による場所への働きかけの 意味に関する考察

山村 美保里¹

¹学生会員 東京工業大学大学院 博士課程 (〒152-0033 東京都目黒区大岡山2-12-1 W9-93,
E-mail : yamamura.m.ac@m.titech.ac.jp)

市民活動による活動場所への働きかけは、参加者及びその場所にとってどのような意味があるのか。本研究では、場所に関する既往知見から、場所を構成する要素を抽出し、モデル図の作成と具体的な市民活動での検証を試みた。その結果、場所には誰にとっても不変の、地理的要素、人為的要素、物理的表出物という客観的特質と、個人によって異なる、個人の経験、客観的要素の理解、獲得した規範・文化という主観的な要因があるとする事ができた。具体的な市民活動への適応によって、客観的特質の変化はなくとも、市民活動を通じた場所への関わり方によって主観的な要因は変化する事と、活動は場所に新しい意味を与えることを示した。

キーワード:市民活動, 場所の要素, 場所の意味, 縫ノ池湧水会

1. はじめに

(1) 背景と目的

高度成長期に誕生し、1980年代まで盛んであった住民運動とも称される市民による公共工事等への反対運動は、環境が壊されないように求めるものであった。一方防災も含めた環境改善は、経済的側面及び事業実施の技術的側面からも行政が事業主体となって行い、市民は行政と良好な関係を保ち、さらに事業実施後に改善された環境を守る活動をしていることも多い。こうした生活環境における課題に関心を持つ市民が自発的に、グループで行う長期にわたる活動は市民活動と呼ばれる。市民活動の活動促進や継続のための研究は多くなされており¹⁾²⁾³⁾⁴⁾、要因も特定されてきている。しかし市民活動による環境への働きかけに対する意味や意義について考察した研究は見当たらない。

市民参加を活発にする一つに、ソーシャル・キャピタル (以下SC) がある。SCの定義は、パットナムによる「人々の協調的な行動を促す『信頼』『互酬性の規範』『ネットワーク (絆)』」が最も一般的に理解されている概念である⁵⁾。市民的美徳との相違点に着目した「美徳にあふれているが孤立した人々の作る社会は、必ずしもSCにおいて豊かではない」⁶⁾は、SCの特徴をよく表している。SCの発達は市民活動を活性化し、また市民活動が新たなSCを醸成するなど互いに高め合う関係にある⁷⁾。

地域愛着もSC同様に、市民活動を活発にすることは

知られており⁸⁾、多岐にわたる分野で研究されている。住区に関する地域愛着の既往研究を概観した園田は、地域愛着は「人間と場所との間の感情的なつながり」と定義されるとし、肯定的感情、失って初めて気づく、時間軸などが愛着に関与していると指摘している⁹⁾。

市民活動の持続可能性に影響する心理要因を検証した羽鳥は、地域愛着は当該地域の課題に対する市民の発信傾向を促進し、離脱傾向を抑制する方向に働くことを確認し、さらに地域の歴史への興味や関わり合った記憶と関連がある可能性を指摘している¹⁰⁾。しかし地域愛着に関する研究の多くは、形成後の愛着要素を分析して、寄与あるいは構成する要因を抽出するもので、要因の構造化は行われていない。

市民活動における継続と次世代への継承の重要性は長く指摘されており、関係する要因の解明は進められているが十分には至っていない。特に活動の継承は成功事例も少なく、要因の特定も困難な状況にある。そこで本研究では、市民活動の継承について検討していく上で、活動が行われることが地域や活動参加者にもたらす意味を明らかにすることに意義があると考え、場所と市民活動の働きかけを構造化して考察することとした。場所についてはこれまで多くの研究が行われ、場所を構成する要素は考察されてきている。

以上より本研究は、既往研究の知見をもとに場所のモデルを試作し、具体的事例で検証することによって、市民活動が場所へ働きかける意味に関する基礎的知見を得ることを目的とする。

(2) 研究の方法

はじめに場所の意味等に関する既往研究の知見のいくつかを概観し、場所を構成する要素を抽出し、それらから場所を構成するモデル図の試作を行う。次にモデル図に具体的な市民活動の実例をあてはめて有効性を検証し、市民活動が場所へ働きかけることによる意味を考察する。実例は、佐賀県白石町の縫ノ池湧水会を対象とする。湧水会誕生から事務局長として会の運営と催事の実施を実質的に担ってきたA氏へのヒアリング内容と（表-1）、活動に関する資料をデータとして分析する。

表-1 ヒアリング実施の概要

	実施年月日	対象者	備考
インタビュー	2014/8/2	湧水会事務局長A氏	場所は主に
	2015/6/3		川津地区公民館及び
	2018/12/10		縫ノ池周囲

2. 場所の意味及び構成要素等に関する既往研究

(1) 場所の定義

レルフは「場所の現象学」で、場所のアイデンティティの構成要素には、人間の活動、意味、静的な物理的要素があると述べ、人と場所との関わりには、馴染みや感情移入のある「内側性」と、見知らぬ土地のような「外側性」があり、地理学のような場所を「客観的外側性」としている¹¹⁾。

トゥアンは空間と場所について、計測可能な抽象的な空間と、経験や知識を通して自分に意味のある場所になることの違いを示した。ここでいう経験とは、表面的に体験することではなく、習慣や仕事の技能のように、日常的に繰り返し無意識に行えるようになるまで身体に覚えこませる行為のことを指している¹²⁾。

ヘイは、場所の定義に関連する先行の研究知見から、英語圏におけるplaceの用語は曖昧に使われており、位置のような意味だけではなく、地域社会における個人的なplaceや、自分の部屋や故郷などの各々の気分を示す対象も含まれること、場所に感情的なつながりができると場所に対する価値が変わることも含まれるとした。また後述のように具体的な面接分析を通して、場所に対する評価における時間軸の重要性を示した¹³⁾。

以上より、場所についての確定した定義は認められないが、位置や広さなどの地理的な要素と、経験や場所とのつながりによって生じる感情とがあることは多くの研究によって示されている。

(2) 個人の経験

場所に個人的な経験や思いが投影されていることに着目したTwigger & Uzellは、Breakwellの自己アイデンティティ4つの要素（継続性、自尊心、自己効力感、弁別性）が場所アイデンティティにも見られることを、ロンドン再開発地区の住民への聞き取りから明らかにした¹⁴⁾。場所は過去を思い出す手がかり、慣れ親しんだビルがあることは自分が存在している感覚になる、長く住むことによって近所が特別の場所になった、などの回答は、場所に対する評価は、個人的な経験と密接な関係があることを示している。

ヘイは、ニュージーランドのバンクス・ペニンシュラに関わりを持つ居住形態や居住年数の異なる人々に面接を行い、場所の感覚が醸成される過程の解明を行った。観光客、夏休みだけの滞在者、そこを故郷としない転入者、先祖代々住み続ける住民、地域の自然物と精神的つながりを持つ先住民等の、異なる居住形態とそれぞれの居住年数によって、場所感覚(sence of place)が5つの発達段階をあらわすことを示し、場所との関わりや長さが、場所感覚に影響することを構造化した¹⁵⁾。

言葉として語るができる記憶に残っている個人的な経験は、人の場所への感情や感覚に影響があることを示している。

(3) 経験によって獲得される規範・文化

人は育った環境によって、同じ現象でも異なる反応をとるように、見え方や思考は周囲の環境から無意識に影響を受けている。人が環境及び場所から受ける影響と、場所に対する影響との関係では、ホールとトゥアンが深く考察している。

ホールは著書「かくれた次元」において「異なる文化に属する人々は、ちがう言語を喋るだけではなく、違う感覚世界に住んでいる。（略）そのためある文化の型の感覚的スクリーンを通して受けとられた体験は、他の文化の型のスクリーンを通して受け取られた体験とはまったくちがう」¹⁶⁾ ことを動物や異なる文化の人間の行動等から明らかにし「文化は人間の神経系の根源にまで浸透しており、世界をどう知覚するかということまで決定している」¹⁶⁾と、獲得された規範が、意識されないレベルで環境に対するすべての行動に影響していることを論じた。

トゥアンも「文化の体系が行動を根本的に異なる型にあてはめてゆく」¹⁷⁾ 「人が自分のいる世界をどう分割し（略）どう評価するかは、その人の属する文化によって異なっている」¹⁸⁾と、人は所属する文化によって見え方や行動に影響されることを示している。その能力がどのように獲得されるかについては「人は仕事をすると、世

界を創造すると同時に自分自身の身体も改変する」¹⁹⁾
「古い建築物が散在している風景は、その風景を見る誰にでも歴史的な解釈をするように迫るわけではない。そのような視点を持つためには『ものの相違を見分ける眼』が必要なのである」「ひとたび習得された技能は、呼吸と同じくらい当然のことになる。それだけでなく、我々は技能を習得することによって方向づけられる」²⁰⁾等にみられる。同じ視覚世界に接しても所属する文化によって受け取る内容は異なり、それが行動内容にまで影響することを述べている。

中村は、公園計画において「見る人の想像力に依存して顔つきが変わり、つぎつぎにイメージを生成しつづける」ということが可能となる設計を検討する中で、公園での経験を重ねた者が見る風景を「内側に立つ者だけに与えられた風景」といい、よく知り見分けることができる眼を持つ者の見え方を、よく知らない第三者の認識と異なることを強調している²¹⁾。

これらは、同じ体験をする場合でも、それぞれの持つ経験や文化習慣によって、受け取る感覚や理解する内容が違い、それが行動にも影響することについて説明している。

(4) 場所の構成に影響すると考えられるその他の要因

前項における獲得される規範や文化は、所属する集団と共有する過程において養われる一面も有する。

和辻は「風土」において、例えば家屋の材質や形態が集団内に定着していく様を「さまざまな制約がその軽重の関係において秩序づけられつつ、ある地方の家屋の様式が作り上げられてくる」「その様式がそれを産んだ風土に規定されている」と述べており²²⁾、逆にいえば、こうした家屋に親しんだ者は、その様式形態を合理的な理由とともに了解し、トゥアンのいう「分節」を行うことができるようになると考えられる。それはその地域の集団が共有している分節の眼ということができる。

中村は「風景学入門」において、特定の社会集団が共有している風景のイメージを、「風景の集団表象」とよび、特定の集団内で通じる言葉のような性格を持つと述べている。そしてその共有された風景イメージは、「諸芸術や言語のかたちで客観化し外在化する段階にいたって初めて安定する」²³⁾という。

また仕事を習得することが自身の身体を改変することの類似に、技能を習得するための「型」がある。武道や茶道などの伝統芸能などは、型通りの同じ手順を繰り返して覚える。南方録の研究者である久松はこうした稽古の目的を「特定の法則が自己の内の作用に転ぜられ、法則において自在を得ることによって自由に法則を創造する主体となる」²⁴⁾といい、意識しなくてもできるよう

になるまで身体に覚えこませることは、コツや極意を習得するための手段であり、さらにそうした習得から新しい創造が可能であると述べている。

このように、特定の社会で長い時間をかけて洗練されて共有している視覚文化的資産や型などの方法も、場所を構成する要素と考えられるが、考察できるまでの把握には至っておらず、本研究では、場所の構成要素の可能性を指摘することとどめ、詳細は今後の課題とする。

(5) 場所とアイデンティティ

レルフは、場所アイデンティティに関する先行研究を概観し「観察者の経験や目、心、そして意志の中に存在する」としているが、場所の構成要素の意味や物質的要素との関係は不明である。プロシヤンスキーは、場所アイデンティティを自己アイデンティティの一側面とし、特に日常的な意識されない身近な物理的環境の重要性を示した²⁵⁾。

一方、心理学分野でのアイデンティティは「他者に対して自分が自分である感覚」²⁶⁾、「人がある特定の人びとの集団に所属していることと結びついた同一性」²⁷⁾などのように、エリクソンが提唱した自己の同一性を表す概念であり、自己存在を示す対象のみ示すものではない。つまり個人のアイデンティティの一部が、ある場所での経験と同一化している状態は、場所がその人のアイデンティティを保持しているのではなく、その場所に対して自己のアイデンティティが投影されていることを意味すると考える。場所アイデンティティという表現において、場所にアイデンティティが所在することを意味するのは、アイデンティティが個人固有のものであることと矛盾するが、個人の中にあるのであれば、場所に対するアイデンティティと表現することが適当ではないだろうかと考える。従って本研究では、アイデンティティを構成する場所の要素は、個人の経験を中心とした後述する主観的な要因に含まれるとし、場所アイデンティティの用語は用いないこととする。

3. 場所を構成する要因のモデル

前章での場所に関する既往研究の整理から、場所には地理的要素のような誰にとっても不変の要素と、個人の経験など人によって異なる要素があることが示された。本章では、以上をもとに場所を構成する要因を特定し、モデル図の作成を試みる。

(1) 客観的特質

a) 地理的要素

レルフの「客観的外側性」、ヘイの「位置のような意味」に示されているように、地形、地質、気候等の地理学的要素、位置などを示す地図情報など、その場所が有している地理的な要素である。

b) 人為的要素

その土地で暮らしてきた人々による、生業やインフラ、災害への備えなどの、人による土地への働きかけがある。また、その土地で積み重ねられてきた歴史的事実も土地の有する人為的要素と考えられる。

c) 物理的表出物

前項の地理的要素、人為的要素のうち現時点に表出しているもの、樹木や土地の起伏、川や池、建築物や道路などの物理的要素がある。

(2) 主観的な要因

a) 個人の経験

Twigger & Uzellの同じ場所に対する思いの違い、ヘイの居住の形態と年数による場所感覚の相違は、場所との関わり方が、その人の場所への主観的な評価となっていることを示していた。そこで本節ではこの点に着目し、個人の経験は場所への意味を付加してると考える。

この個人の経験は、その場所で行われるあらゆる経験、1人で行った単独体験のほか、家族や友人または共同体など他者との共有体験も含まれる。それは2(3)項でみたように、同じ体験をしても、背景となる文化や経験が異なれば受け取る印象も異なることによる。例えば市民活動によるある場所の清掃作業で、子どもの頃から作業している人と、初めて参加した人、他地域からの参加者では、同じ場所の同じ体験であっても場所の印象や意味は異なる。従って同じ共同体験でも、個人にとってはその人固有の体験であると考えられる。以上より、場所に対

するあらゆる経験を「個人の経験」とし、場所に対する主観的な一要因とする。

場所愛着との関係では、上記の個人的経験がポジティブな場合に愛着が増し、ネガティブな場合は嫌悪となるように、経験の質の結果の認識と考えることができる。本研究では場所の構成要素としては割愛するものとする。

b) 客観的特質の理解

前節における地理的要素や歴史などの人為的要素の客観的特質は、内容そのものは誰にとっても同じだが、それをどれだけ知り理解しているかは個人ごとに異なる。そのため理解の程度によって、その場所への見方や印象に相違が生じるということが起きる。例えば今は丘と平原となっている古戦場跡を目にした場合、そこでの戦いの歴史を知っていれば武将たちの戦いに思いめぐらせることができる対象となるが、そうした歴史を知らなければ見たままの平原にのどやかな印象を持つかもしれない。また地形への造詣があれば、土地の段差にかつての川の流れをイメージすることもできる。

このように場所の持つ客観的特質の理解の程度によって、その場所から受ける印象や意味が異なってくると考えることができる。これを「客観的特質の理解」として主観的な要因の一要素とする。

c) 経験によって獲得される規範・文化

2(3)で経験や技能習得の過程においてものの見え方や思考が規定されていくことを概観した。ホールの「世界をどう知覚するかを決定している」、トゥアンの「方向付けられる」等に表現されるような規定が生じるのは、習得された文化による。プロシャンスキーは、アイデンティティに影響をあたえる要素として、性別、民俗学的、宗教、職業、思い出、他人の振舞い等を挙げている。

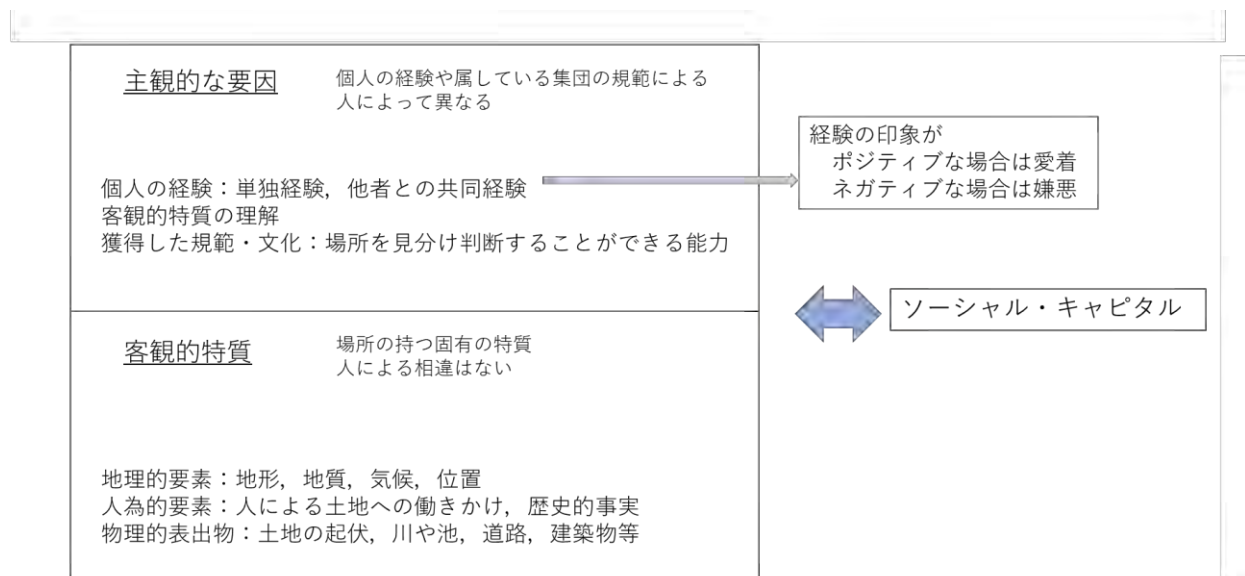


図-1 場所を構成する要因に関するモデル図

人は、しつけや教育、就いた職業での訓練から、生きていくために必要な規範やルールを身に着ける。その規範やルールを含めた文化が、行動や振舞いに影響を及ぼす。例えば、既述の古い建築物を歴史的解釈ができるためには、それを見分ける眼が必要と言っていることに着目すると、古く使い勝手の悪くなった建築物の扱いに対し、価値を見分ける眼を持っていてそれが貴重なものと判断すれば、必要な処置を施して保存に努めるであろう。しかし見分ける眼を持っていなければ、使用に便利な建物を新しく建てるために、古い建築物を壊すことを厭わないであろう。また住民にとって神聖な山や川が、第三者には意味をなさないために破壊される例も、同様の構造にあるといえる。

以上より、ある場所を見分け判断することができる「経験によって獲得した規範・文化」を、主観的な要因の一要素とする。

(3) モデル図

前節までで、場所には「地理的要素」「人為的要素」「物理的表出物」などの人による異同のない「客観的特質」と、場所における「個人の経験」「客観的特質の理解」「経験によって獲得した規範・文化」の個人によって異なる「主観的な要因」があることを示した。

信頼やネットワークを示すSCは、市民活動をはじめとしたコミュニティや社会構造から教育等様々な分野から影響を受け、また逆にこれらへ影響を与えるものである²⁸⁾。地域との関わりでは、SCは場所の要因というよりも、場所愛着同様にその多寡が経験の質を左右するという関係にあり、個人による場所の状態に影響を与えることが妥当と考える。従ってモデル図では、場所へ影響を与える要因とした。以上を、図-1に示す。

4. 具体的事例での検証

(1) 白石町縫ノ池湧水会

a) 地域の概要

縫ノ池は、佐賀県白石町西部杵島山麓の集落の中心にある約6000㎡の池で、中央に平安時代から続く巖島神社弁財天が祀られ、境内にはメタセコイヤの大木と幾つかの古い石碑がある。白石平野は古くから干拓が行われ、灌漑用水の確保は時に困難を極めた。昭和初期から地下水を電動ポンプでくみ上げ簡便に水を得られるようになったが、過剰汲み上げの結果、縫ノ池の湧水は涸渇して池は干上がった。池に水の無い40年の間には、駐車場に活用する話も出たが、地域の人々は「罰が当たる」と埋めずに神事を続けていた。

行政による地盤沈下対策事業によって、地下水の代替水源確保が行われた。2000年に嘉瀬川ダムから白石平野へ農業用水供給を開始し、同時に農業用の地下水利用を停止した。翌年2001年に池に湧水がみられ、水がたまり始めた。

b) 湧水会の設立と活動内容

地区の年配者は、子どもの頃に水のある縫ノ池で毎日のように遊んでいた。池で泳ぎ、筏を作って浮かべ、魚やシジミをとって家で食べていた。そうした思い出のある住民は、池に水が戻ると、なつかしさとともに池を地区の人たちの憩いの場にしたいと考え、2003年7月に「縫ノ池湧水会」を発足させた。会員は地区住民で構成されており、弁財社の神事や農事に関わる共同作業などによって日ごろから密接な関係を築いている。

湧水会主催の主な行事は、盛夏のキャンドルナイト(2008開始)、晩夏の釣り大会(2004開始)、秋の茶会(2002開始)、冬の生き物調査(2008再開)等で、2017年に新た

場所を構成する要因		2001年頃 (池の水の復活の頃)	2018年 (活動17年継続の頃)
主観的な要因	個人の経験	子どもの頃は池で泳ぎ、魚やシジミをとって食べた。 涸渇中も神事をしていた。水が戻った池に感動した	池で湧水会の活動を繰り返し行ってきた
	客観的特質の理解	地理的要素や物理的表出物の存在の認識、過剰汲み上げで干上がった 池と弁財社は古くから伝わっている	社と池は平安時代の平重盛に縁がある 戦国時代の放生の逸話が殺生を戒めている
	獲得した規範・文化	弁財社の神事、農業に関する作業	湧水会の運営と催事開催のスキル
客観的特質	地理的要素	佐賀県白石町杵島山麓、白石平野西端、池面積約6000㎡、	
	人為的要素	弁財社は平安時代から続く 昭和期に池の水が干上がったが、公共事業で湧水が復活した	
	物理的表出物	池、池の中央に弁財社の鳥居と社、メタセコイヤの大木、放生池を示す石碑	

図-2 縫ノ池における場所を構成するモデル図の適応

に蛍の飼育を開始した。これらの活動は、様々な表彰を受けたため見学者も多く訪れるようになり、見学者から地域についての質問を多数受けるようになった。それらに答えられるよう、2006年に郷土歴史家を招いての歴史勉強会を行い、翌年に成果を冊子にまとめた。それまで弁天社は古くからあるお社という認識だったが、詳細を学んだことにより、社の始まりは平安時代の平重盛公による奉納であり、戦国時代には池での殺生を戒めた逸話があることなどを知った。そのことが、より意欲的に活動に取り組むことにつながった。最近ではこれまでの経験を生かして、縫ノ池以外の地域の歴史や物産の調査を行っている。

(2) モデル図への適応

縫ノ池湧水会の代表者A氏にとっての縫ノ池の内容を、3章のモデル図に適応させた(図-2)。場所認識の時期は、市民活動による変化を検討するために、湧水が復活したばかりの2001年頃と、活動を17年継続してきた2018年とを比較した。各要素はヒアリングで得られた内容に限定した。

はじめに客観的特質を検証する。地理的要素は、位置を示す佐賀県杵島山麓や白石平野西端、池面積約6000㎡、などが挙げられる。歴史や暮らしの営みを示す人為的要素は、弁天社は平安時代から続き、池の水は昭和期に干上がったが、その後の公共事業によるダムからの導水で湧水が復活したなどが挙げられる。目に見える物理的表出物は、池の水、池の中央に弁天の鳥居と社、メタセコイヤの大木、放生池を示す石碑などである。これらは、17年の間には変化はなかった。以上はA氏ほかの地区住民にとっても、他地域の者にとっても変わらない要素である。

次にA氏の主観的な要因を検証する。水が戻ったばかりの2001年の個人の経験は、子どもの頃に池で遊んだ経験、水の涸れていた間の弁天社催事、水が戻った池に感動したことなどが挙げられる。客観的特質の理解では、地区住民にとって周知であった、池と弁天社は古くから伝わり、池の水の涸渇と復活の理由などである。物理的表出物の社や石碑は、深い理由は知らないが存在は認識していた。獲得される規範・文化は、生まれ育った地区なので、子どもの頃から弁天社の神事や農業に関する作業などは十分に心得ていた。

2018年では、A氏にとっての客観的特質は、特に変化はしていない。一方、主観的な要因は、上記に加え図-2の色付け部分に相当する部分が新しく付加されている。個人の経験では、縫ノ池は湧水会の行事を毎年繰り返し活動を行ってきた場所であり、2001年以降のそれまでとは異なる経験の蓄積がある。客観的特質の理解では、古

くから伝わるという漠然とした認識から、歴史を学ぶ機会を得て、弁天社の始まりや放生池の由来の詳細を知った。経験による獲得した規範・文化は、湧水会という市民活動を運営し催事を実施するスキルを得た。以上のように、A氏にとっての縫ノ池は、湧水会の活動を通して、様々な主観的な要素が付加されていった場所である。

(3) 湧水会の活動の場所への働きかけの意味

A氏にとっての2001年の縫ノ池は、子ども時代に毎日のように遊んだ懐かしい場所であり、その後水が枯渇し湖底があらわになったが、公共事業によって昔の景色に復活したものであった。17年間湧水会の活動を続ける間に、様々な催事を実施した場所となり、さらにこれまで身近にありながら深く知らなかった地域の歴史の知識が加わった。2018年頃のA氏にとって、縫ノ池は新しい意味を重ねた場所になったといえる。

A氏の歴史認識の変化について詳しくみると、歴史を学ぶ前の2001年は、例えば弁天社境内の石碑は、昔からある古い石碑という程度だったが、詳細を学んだ後は亀の上に巻物が載っている碑は、放生を表していることだとわかった。これはA氏の池の人為的要素の歴史認識が深まり、石碑という物理的表出物の意味が変化したことを示している。その客観的特質の変化は、地域の歴史と池の生き物を大切にしなければならないという考えとなって、活動内容にも変化を与えた。歴史冊子作成以後は、地区の子供たちに歴史を教える機会を設け、生き物調査を再開するなど、歴史と生き物を大切にする活動を増やし継続していることに現れている。

歴史認識と場所への愛着について、Stefanik.A et alは学生を対象にした実験で、地域の歴史を教えることと場所への愛着及び地域活動への参画に、正の相関があることを明らかにしている²⁹⁾。A氏は生まれ育った場所に自ら学ぶ機会を設けたので、学生への実験とは動機に違いがあるが、ヒアリングからは、歴史を知ったことは地域を大切にしたいという気持ちを深め、活動継続のモチベーションとなったことがわかっている。歴史を知ることが、地域への愛着と活動の継続に影響を与えるものといえる。

以上、湧水会縫ノ池のA氏において、場所を構成する要素の客観的特質と主観的な要因を示すことができた。さらに主観的な要因は、湧水会活動による場所への働きかけによって、新たに付加され変化した。それは市民活動が、場所の意味に変化を与えたということができる。さらに場所の意味の変化が、逆に活動内容にも影響を与えていた。市民活動は、客観的特質が変わらなくとも、場所への関わり方によって、場所の意味の変化をもたらす、新しい活動の企画をも誕生させるなど、場所との相互作用的に活動の原動力にもなると考えられた。

5. おわりに

本研究では、場所に対して意味が生じることについて、先行研究の知見にならないながら、構造化することを試みた。場所には、地理的要素、人為的要素、物理的表出物という誰にとっても不変の客観的特質と、個人の経験、客観的要素の理解、獲得した規範・文化という個人によって異なる主観的な要因があることを示した。4章では縫ノ池湧水会という具体的な市民活動を例にモデル図を検証し、客観的特質の変化はなくとも、市民活動を通じた場所への関わり方によって主観的な要因は変化し、場所に新しい意味を与えること、それが活動内容にも影響を与えていることを示した。

市民活動と景観を考えると、市民が自分たちにとって必要とする活動をしている様子は、重要な要素であると思われていたが、理由は判然としなかった。人々の活動が風景の一部であることを示し、活動の意義を構造化してみたいというのが本研究の発端であった。しかし執筆に当たっては、先行研究の参照数の不足や、理解と考察の未熟さが目立った。モデル図も逐次検討修正をしていかなければならない。いずれも今後の課題としたい。

謝辞：本研究の調査において、縫ノ池湧水会の赤坂宗昭氏には多大なご協力を頂いた。厚く謝意を表する。

参考文献

- 1) 藤澤浩子：自然環境保全分野における市民活動とその長期継続要因, *The Nonprofit Review*, Vol.10, No.1, pp.37-48, 2010
- 2) 伊藤将司・森本章倫：参加型の社会資本整備事業における継続活動の要因分析に関する研究, *土木学会論文集D3*, vol.67, No.5, pp.101-108, 2011
- 3) 小松郁也・村上一真：住民の河川保全活動への参加と継続の要因に関する構造分析-アドプト・プログラムに着目して-, *土木学会論文集G*, Vol.71, No.5, pp.337-345, 2015
- 4) 山村美保里：世代を超えて持続する市民活動の長期継続要因に関する研究, *土木学会論文集D1*, Vol.75, No.1, pp.1-11, 2019
- 5) 稲葉陽二：ソーシャル・キャピタル入門, pp.23-27, 中公新書, 2011
- 6) ロバート・D・パットナム (柴内康文訳)：孤独なボウリング, p14, 柏書房, 2006
- 7) 内閣府国民生活局, 平成14年度ソーシャル・キャピタル豊かな人間性と市民活動の好循環を求めて, 2003
- 8) Lewicka. M : Ways to People Active, The Role of Place Attachment, *Journal of Environmental Psychology*, Vol.25, pp.381-395, 2005
- 9) 園田美保：住区への愛着に関する文献研究, *九州大学心理学研究*, Vol.3, pp.187-196, 2002
- 10) 羽鳥剛史, 片岡由香, 尾崎誠：市民活動の持続可能性に関する心理要因分析, *Vol. 72*, pp.407-414, 2016.
- 11) エドワード・レルフ (高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳)：場所の現象学, ちくま書房, 1991
- 12) イーファー・トゥアン (山本浩訳)：空間の体験, ちくま学芸文庫, 1988
- 13) Hay. R : Sense of Place in Developmental Context, *Journal of Environmental Psychology*, Vol.18, pp.5-29, 1998
- 14) Twigger-Ross and Uzzell. D : Place and Identity Process, *Journal of Environmental Psychology*, Vol.16, pp.205-220, 1996
- 15) エドワード・ホール (日高敏隆・佐藤信行訳)：かくれた次元, p5, みすず書房, 1970
- 16) 前掲書15), p259
- 17) 前掲書12), p7
- 18) 前掲書12), p67
- 19) 前掲書12), p183
- 20) 前掲書12), pp.342-353
- 21) 中村良夫：湿地転生の記, pp.157-171, 岩波書店, 2007
- 22) 和辻哲郎：風土, p16, 岩波書店, 1979
- 23) 中村良夫：風景学入門, pp.60-73, 中公新書, 1982
- 24) 久松真一：茶道の哲学, p90, 講談社学術文庫, 1987
- 25) Proshansky. H, A.Fabian., Kaminoff. R : Place Identity -Physical World Socialization of the Self, *Journal of Environmental Psychology*. Vol3, pp.57-83, 1983
- 26) 谷村千絵：EH・エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する考察, *教育哲学研究*, Vol.80, pp.48-63
- 27) 遠藤辰雄：アイデンティティの心理学, p21, ナカニシヤ出版, 1981
- 28) 前掲書5), pp.71-75
- 29) Stefanica,A, Bilewicz,M, Lewicka,M : The Merit of Teaching History ; Increased Place Attachment Enhances Civic Engagement and Social Trust, *Journal of Environmental Psychology*, Vol.51, pp.217-225, 2017